



ごんぎつねの
続き



karinomaki

ごんぎつね

新見南吉の絵本で、「ごんぎつね」というのがあります。私はこの話を読んで、一日中泣いていました。なんとか、救いのある話にしたい、続きを書きたいと思い、作者に怒られるかもしれませんが、書きます。

話の中では、ごんはいたずらもののきつねで、悪さをしてばかりで、兵十のとったうなぎを逃がしてしまいましたが、兵十がそのうなぎを病気で死にかけている母親に食べさせるつもりで、母親はうなぎを食べられずに死んでしまったことを知り、兵十にたくさんおわびの栗を送ります。しかし、ごんが家をウロウロしているのを見た兵十に誤解されて撃たれて死んでしまう、という話です。

ごんは、栗を持ったまま、ばたりと倒れ、全てを知って兵十に、「お前が栗を持ってきてくれていたのか」と聞かれ、ただうなずいて死んでしまいます。

私は、最後の場面が焼き付いて頭からはなれなくなり、泣き続けました。一生懸命の愛が報われない、そして入院になってしまった自分と重なりました。

ごんの愛

こういうのはどうでしょう。

ごんは、天国へ行きました。しかし、自分を撃った兵十がどれだけ痛いか、・・・心が痛いか知っていました。ごんは、愛でいっぱいだったから。

だから、ごんは、天国で、兵十のために、神様に頼みました。自分が今幸せであることを伝えたいのです。方法を教えてください。

しかし、神様は言いました。残念ながらそれは難しいよと。ごんは泣きました。兵十が毎日泣いているのが見えたのです。

しかし、兵十の生き方は、ごんの死によって変わっていきました。兵十は、銃を捨て、動物を殺さなくなったのです。

神様は言いました。一日だけ、おまえを兵十の夢の中に出してあげよう。

夢

兵十はその時、風邪をこじらせて一日中寝込んでいました。
夢の中にごんが現れました。銃を持って。

そして言いました。「兵十、あんたはこのまま殺生をしないで生きていくつもりかい？いいんだよ。動物は、痛くないんだ。心がきれいだから、かごの中の鳥も心で羽ばたいているし、殺される獣も、神様が痛みを感じないようにしているんだよ。でも、僕は痛かったんだ。どうしてかというとな、あんたにわかってもらえなかったと思ったから。だから、最後に僕に感謝してくれてうれしかったんだ。でもね、もっと痛かったのは、あんたの涙を見たときだった。僕を撃ってしまったあんたはもっと痛かったんだね。」

兵十は泣きながらごんを抱きしめて言いました。「ありがとう。おまえはきっと人間と同じなんだね。動物も人間も同じ心を持っているんだね。」

兵十

兵十は、そのあと、庭に栗の木を植えました。そして、いつも話しかけました。すると、栗の木からごんの声がするのです。二人の心は結ばれました。

それは、神様が作った奇跡でした。